

まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

発行/昭和63年6月15日 No.5
えひめ地域づくり研究会議
(財)愛媛県まちづくり総合センター

特 むら 集

土に根ざしてむらを思う／ちろりん農園

嫁が来るムラ／長谷集落

町、我が職場／共栄網

いのちなる海、温かい心／遊子

柔軟に、

そして頑固に生きる島／釣島

町のムラ／松山

REPORT

「からいも交流」と農村の自立

「ひと」と地域づくり／大山町

MESSAGE

国際人形劇フェスティバル in 松山

フェスティバル in 四国カルスト

かぐや姫クラシックコンサートいかざき

Let's ハンコン通信

研究会議 News Letter

五十崎藩、藩づくり哲学



VOL 5

土に根ざしてむらを感じる



ちろりん農園(丹原町)

西川 孝 則

急な原稿要請で構想がまとまらずに、まもなく、とりあえず現在に至るまでの過程と現状を紹介した上で今後の展望と希望を述べてみたいと思います。

● ぼく

ブラジルへ行って 農業がしたい

四国には縁もゆかりもなかった私は、大阪の中心部から十分ほどの守口市で十八才の高校卒業まで暮らしていました。都会とはいえず、私の小学校低学年の頃までは有名なレンコンの産地で、田の生き物とふれ合うこともでき、また少し足をのびして淀川の土手まで行けば種々の昆虫や水辺の生き物が豊富にいました。しかし、折からの

高度経済成長の波が近くの田畑を宅地に変え、子供たちとそうした生き物との絆を断ち切ってしまう。昆虫大好き少年だった私はいつでも虫のいるような自然のあるところで仕事をしたいと繰返し思いながら成長したせい、小学校の卒業文集には「ブラジルへ行って農業がしたい」と書いていた……ということの後年母が妻に語ったそうです。

そんな希望は夢として深くしまいこみながら、ごく普通の中学時代を過ごし、府立四条畷高校(愛媛)に同校出身の人はいませんか?へ進み、一年、二年と同級だったのが現在の妻です。大学は鳥取大学農学部へ進みました。入学当時は、農学部へ入った者は殆ど就農するもんだと思っていました。無知だったのですねえ。大学時代に中国へ来た当時の共同生活者であり、現在は北条市で『自給の邑』を開設した池谷氏と平岡氏に出会

いました。池谷氏はサッカー部の平岡氏は農学部の先輩でした。

● オーストラリア

大規模な機械化は 自分に不向き

大学時代は、北海道、九州、長野など各地へ、色々な農業の実習に行きました。四年目は休学し、半年を大阪中央市場野菜部の仲買の店舗で毎朝四時から夕方五時までアルバイトしました。たった三坪ほどの店で年商数千と聞き、流通機構が農家を食いものにしてあるその一端を垣間見たように思えます。その半年で資金調達し、残りの半年をオーストラリア南部の二、三の農家で過ごしました。



▲ちろりん農園の西川宅

そこでの体験により、昔からの憧れだった海外での農業は自分に不向きであると実感しました。あまりにも大規模な機械化は、青空の下の工場労働者という感じだったので。これを機に、農の夢は日本国内で自給自足の農業ができればという希望に変わりました。

● 愛媛

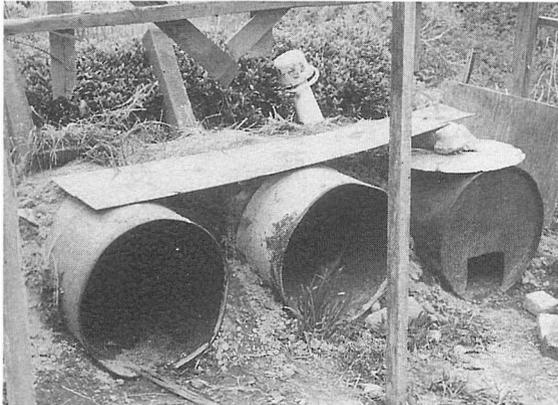
丹原町来見自給のむら “ちろりん農園”

卒業後は、就職せず、岡山の山奥で岡山大学卒業後入植した人のやっている『とんとん牧場』で実習するかたわら、雑誌『現代農業』への投稿(土地も金もないけれど何とか農で暮らしたい)に対して頂いた手紙——その八十%は養子にこないかでしたが——の方々をたずねて北海道から九州まで各地をめぐり、自営の方向をさぐりました。

その中で、みかんの不況のおかげで世話して頂いたのがこの丹原町の来見(くるみ)という地名だったので、昔のNHKの子供向け人形劇『ちろりん村とくるみの木』を連想し、ちろりん農園と名付けました。自給の充実を生活の中心

にすえようとする過程で、有機農業研究会のことを知り、色々な講演会に出席して農業の恐ろしさを知り、有機農業の道を歩み始めたのは四国に来て二年目頃からでした。そして、前述の自給の邑の開設でちろりん農園が一世帯になったのは六年目のことです。それに伴って借地を返したり、果樹の苗を植え、作目を変えたりして、現在の経営面積は、柑橘、キウイフルーツ、スモモ、クリ、ウメ、ブドウなど果樹七〇a、野菜は借地畑五〇aでレンコン以外のあらゆる野菜を年間三〇〜四〇品目作付けています。それと平飼いの鶏が一〇〇羽余りです。野菜、果物、卵を一週間分詰め合せて、丹原町・東予市・西条市の各家庭へ届けることで生計を立てています。

家族は妻と、長男（六才）、次男（四才）の四人です。昨年十一月、ほんとうにたくさんの人達のお世話になって念願の自宅を新築することができやっと農で暮らす基本が整い、新たな活動に向けて頑張っているところです。



▲西川宅の自家製炭焼きがま

●有機農業

生活の見直しと

“食べもの”を作る姿勢

人間の他に口のついたものを飼っている、一世帯の場合は特に家族旅行とか研究会に行くとか外に向った行動は制限されてしまいません。おかげで一家そろって大阪へ戻ったことはここ数年ありません。もとより、『農』という生活は土に根をはる性質のもので、それを逆手にとって毎日が日曜日という気分です。暮らす中で、地域を、そしてむらを考えてゆきたいと思っています。

有機農業を実践することは易し

いが、有機農業を行うことは難しいと最近思うようになりました。有機農業の野菜がニセモノもほんものも見分けがつかないほど一般市場に出回っている状況の中で、有機農業とは何かと聞かれたら、自らの生活の見直しをどれくらいやっているか、そして食品や商品ではなく、“食べもの”を作る姿勢をやっているかの二点に凝縮されると思います。有機農業的な生活を目指す、そこから派生してくる問題は多岐にわたります。それが現代社会の歪みを映し出しているように思われます。たとえば、水、ゴミ、食品添加物、プラスチック、せっけん、原子力発電食文化と学校給食、第三世界との関連など。これらを眺めてみるとすべてエネルギーの問題であるとわかります。人が文明と称して手を加えれば加えるほど歪む食べものの本質、たとえば季節はずれのハウス野菜の栄養価は露地野菜のそれに劣るにも拘らず、農薬やピニルや石油を使ってそれをしなげれば専業として成り立ってゆかないという社会の状況も問題にしてゆかねばならないと思います。

●私の職業

畑の生きものも家族。

“農業”と言わずに

“暮らし”と言いたい

男はより多くのお金を集めてくのが自立、一人前と考え、子育てや教育問題は母親や学校に任せっぱなしでそれをよしとする状況が今の日本にはあります。人間が生きてゆくために必要な衣食住を全てお金で解決するのではなく、そして拡大、発展が必ずしもいいことばかりではないんじゃないかなあということ、幸せな自給的生活の中から柔かく提起できる、そんなちろりん農園でありたいと思っています。

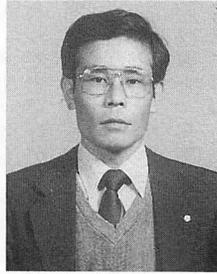
職業欄に農業と書くことに、この頃抵抗を覚えます。私にとって農業は暮らしそのもので仕事と趣味の区別がつけがたく、妻や子供とかかわる時間とも殆ど区切りがないからです。毎日が日曜日気分、多くの人達が集い、地域に根を張ったちろりん農園が様々な人と“むら”を考えてゆけることを念じて、畑の生き物たちとつき合っています。

嫁が来るムラ

長谷集落

野村町

藤本 一三



伊予路に春を呼ぶ椿さんの名物

「おたやん飴」が、どこから切っても同じ顔が現れるように、全国各地のムラも同じ顔になっている。

ムラには、自動車・電話・テレビ・水洗トイレ等々、倉庫には山のような農機具と、何でも揃っているが、肝心な後継者とその嫁不足に悩んでいる。

後継者や嫁が無いと言うことはムラが確実に崩壊への道を歩んでいるのだが……。

そこで、後継者は勿論のこと嫁も有るムラを紹介し、なぜ嫁が来

るのか、と言う視点からムラを考えてみることにしたい。

「長谷」は町の中心部から、約一〇km離れた山間の集落で、戸数三〇戸、その殆んどが農林業を主業としているが、平均所得は町内では中位である。

地理的にかなり不便で、所得もあまり高くない長谷には、後継者が残りしかも嫁がある。便利で所得の高い集落が、後継者不足と嫁飢饉で苦しんでいるのだから不思議なのである。

みんなで話し合う。

長谷では除夜の鐘を合図に集落の氏神様で開く「元旦祭」から年中行事は始まる、この元旦祭も例月の常会も、余程の理由がない限り全員が出席する。

長谷が他の集落と異なるのは常会の方法であろう。例月の常会、臨時の常会を問わず、みんなでよく話し合う、それも全員が納得し合意するまで、何回でも繰り返し常会は開かれ、簡単に多数決で集落の意志を決めることは絶対に行わないのである。

こうした話し合いによる集落運営は、一部役員による請負い運営とはしないで、集落の全員がその責任を分担することとなり、それが集落への愛情と誇りを持つことにつながっているのである。

長谷の人は言う

「うちらは特別なリーダーを作らん方針での、みんなで話し合って決めるんよ」と

しかし、話し合いを重ねそれを実行する事で、優秀な人材が育った、特別なリーダーを作らない長谷から、旧村の村長が三名、県会議員一名が誕生している。

隠居制度

古い時代のムラでは、息子が一人前になると親父は家督を譲り、

隠居したものであった。

今も長谷には隠居制度が残っている。どの家でも後継者が嫁(婿)をもらうと、親父は隠居しなければならぬのである。

つまり、嫁を持たない男は一人前に扱われず、嫁を持てば世帯主としての責任を負い、集落付合いを始めることとなるのである。

又、隠居した親は隠居組に入り、隠居組が受け持っている集落の仕事を行い、文字通り隠から手助けをするが、表には絶対に出ないのが決まりである。

自前で研修を

椎茸生産にいち早く取り組んで来た長谷は、町内でも主たる産地となっているが、椎茸を始めた当時一戸当り二万円の研修費を義務づけ、自費で先進地研修を行ってきたのである。

自費研修だから当然真剣に研修を受けるようになり、成果も挙がるのだが、視察研修には全員が作業衣と地下足袋履きで行くのである。

長谷の人達が大変熱心に勉強するため、ある種菌メーカーの重役が感銘し、それ以後この重役は毎年二回自主的に長谷を訪れ、椎茸づくりを指導するようになった。

婦人会にも役割が

このような集落だから婦人会の活動も活発に行われているが、婦人会にも集落行事が任されている。その主なものは、盆踊りと敬老会の運営である。

長谷の盆踊りには集落の全員が参加するが、なぜか集落外から多勢の人が集ってくる、この人達と集落出身の帰省客が一緒になって、飲み歌い踊ると言った盛大な盆踊りが、婦人の手で行われている。

嫁の来る道

ある時、常々不思議に思っていた事を聞いてみた。

「長谷は全部の家になぜ嫁さんが有るんな？」

「そがいな事分らんぞうー、なぜか知らんが、嫁さんも婿さんも全部有らいネヤ」

と誇らしげに答えた後、

「うちらはネヤ、嫁の来る道じゃけん、いい道にしようぜ、とみんなが昔から言わいネヤ」と言う事であった。

長谷は国道四四一号から約3km奥地に入っているが、集落に通ずる唯一のこの道路を、長谷の人達は「嫁の来る道」と呼び、整備拡張を長い年月をかけたのである。

整備された「嫁の来る道」は朝夕二回、わずか三〇戸のために定期バスが走るようになり、何人もの娘さんがこの道を通して、長谷へ嫁いで来たのである。

水害からの復興

長谷は明治の初期と、昭和十三年、十八年と集落が壊滅するような水害に三度襲われている。

その度に、長谷は多くの人々の支援を受けたものの、自分達の力で復興して来たのである。

長谷が三度の水害から復興するには、集落のみんなが徹底して話し合い、全員が納得する方法で復



▲ 長 谷 集 落

長谷の人達には、集落づくりとかむらおこしと言った気負いは全くない。唯、先人から引き継いだ集落のルールを、当然のこととして守っているだけであり、その結果として嫁が来るムラになったのである。

長谷が守ってきたものは、他の集落がごく最近に失った、ムラが大切に守るべきものであるのだが。

ある人が、自分達が生きる集落に愛情と誇りを持ち、世の中の動きに惑わされないで、自分達にとって何が大切かをしっかりと判断し、悠々と生きるのが、常民の文化だと教えてくれたが、その人も長谷の人である。

旧工事に取組む以外に道はなかったのではないだろうか。

そして、話し合いを繰り返し、集落の総意をまとめ、その事をみんなが力を合わせ実行すると言いう、良い伝統が残ったと話す人もある。



町、我が職場

— 共栄網のむら —

双海町小網

対馬 忠一



先日まちづくりセンターの方から、私の仕事について思うこと、感じた事などを折り混ぜて、みなさんに紹介してほしいとの連絡をいただきました。正直言って私は今の仕事がいつ始まったのか知りませんでしたが、先輩の言い付けを守り、和気あいあい、活気あふれる職場で汗を流す毎日です。現代をみつめても、過去を振り返る機会が来るとは思ってもいませんでした。みなさんの職場はいかがでしょう。今日では真新しい物の追及、徹底した合理化が毎日無言で叫ばれていませんか。この点に

おいて我が職場は認識不足ではないかと思えます。新しい波、変化のある風を呼び込んだらいいのではないかと思えます。まだ私はそこまで考えたことはございません。

●私の職種は第一次産業にはまり、海で生計を立てている漁業です。中型まき網、通称きんちやく網です。伊予灘を操業圏とし、雨・風にも負けずがんばっています。二十数年前は一〇〇名をこえる多くの人が協同運営していました。今では六十数名でやっています。漁師に定年はありませんが、我々は株の協同出資なので、かぞえの六十三才を定年としています。この六十三才定年に定年を引き上げたのは五年ほど前であり、この点だけは他の会社よりも早く

取り入れられているのではないのでしょうか。体を動かして働いているので定年すぎてもみんな元気でいます。老いも若きも一つの愛称で呼んでいるので、別れるときはとてもつらいです。

●さて、ここで株組織『共栄網』について述べさせていただきます。全体を読んでいただければわかると思いますが、共栄網という名がいかにもマッチしているかという所です。今の漁法のもと地引網からだそう。三〇〇年ほど前からおこなわれ、大正時代に今の操業体系が確立した訳であります。その後大きな変化はありませんが、ずいぶんと機械化は進んでいます。昭和五〇年ころまでは、気合と体力で直接網を引いて、みんな苦労していました。夏から秋口にかけてが最盛期で、男どものかけ声勇ましく網引く姿は勇壮でありました。冬でも上半身裸で仕事をすると汗びっしょりというありさまで、私が今の仕事に就いたころは、

まだ手で引いておりまして、ものような身ですから、一網引かないうちに手が硬直して、言うことをききませんでした。物の角に手を叩きつけて腕をほぐしたこともあり。つらいこともたくさんありましたが、いいこともたくさんありました。一つに食事です。海の上で食べる物は最高です。また冬には火鉢がありまして炭火で焼いて食べる魚はなんともいえません。帰って家で食べると味がちがうんですね。なぜでしょうか。また、銀鱈跳ねるイワシを船に取り込むときは心弾みます。そこで海の仕事が終わるわけです。



▲双海町小網地区



次に陸上での製造という内容も知ってもらわなければなりません。ここでイワシから煮干しに変わります。最終は煮干しを作ることにあります。我が仲間は同一の部落の人で組織しているという大事なことも知っていただきたい。同じ所に住んでいるから協調性があり、まとまりは非常によいです。お互いが自分の持てる力を発揮して競い合い、助け合うたのもしい仲間です。

● 今までは伊予灘で唯一のまき網船団です。以前はたくさんありま

したが、我が共栄網は団結の力でいまも立派に運営されています。近年は新しい漁法が開発され、稚魚を取るといようなこともおこなっています。これは乱獲という現代社会の問題の一つにあてはまるのではないのでしょうか。心配であります。

私の家では、祖父、父、私と三代続いていまの仕事をしています。いままでやってこられたみなさんは、力強くないへん辛抱強い人が多くいました。私もがまん強い人間、すなおな人になりたいと思います。

私の町、そして部落は明るくて親切な人ばかりです。一度秋くらいに湯けむりのたっている工場に来てみませんか。新鮮なイリコがいっぱいです。日本一の味です。

▼ 巾着網の操業風景

長い伝統のある巾着網は船団と組んでイワシを追う、このイワシが日本一の煮干となる。



いのちなる海、温かい心

遊子地区(宇和島市)

おいらの誇り
 ……漁網防汚剤を使わない
 わたしの誇り
 ……合成洗剤を使わない

宇和島市の南端に、豊後水道に「タツノオトシゴ」状の細長く突き出た三浦半島がある。その北側沿岸にリアス式の小さな入江が連なり、その入江の奥に、段畑を背に数十戸の集落が点在している。そこが宇和島市遊子地区で、ハマチ、真珠母貝、真珠養殖漁業に、知恵と心を注いでいる「むら」である。戸数三四四戸、人口一、五九二人、うち三二〇戸の漁家が遊子漁協の組合員である。

● 漁業のむらがつぶれた

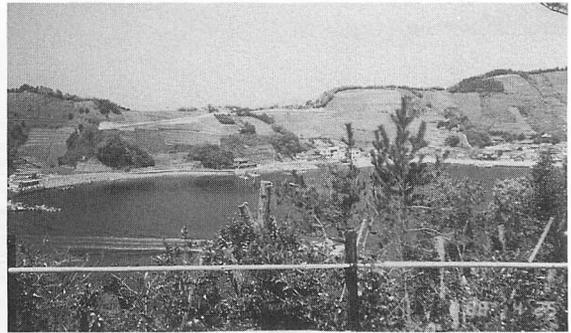
かつて、平等の原則による部落全員の共同経営であり、網がその

まま地域の自治の場でもあったイワシ網漁業のむら。一時期は「宇和海に遊子船団あり、その行くところ不漁無し」とまで言われた。

しかし、価格の低迷と設備投資の悪循環の重圧の中、昭和三十五年には、そのイワシ網漁業が崩壊し、共同経営の網は借金だけが残り、大混乱となった。この旋網の設備資金が全部漁協からの融資であったので、漁協は文字通り網と共につぶれてしまった。

● 歯を食い縛って十五年

漁協役員が総辞職し、新体制のもとで漁業の復興と漁協の再建がはじまった。とは言っても、債権者による差押え執行、競売、裁判など、倒産による混乱とその收拾は、避けて通れないものではあつ



▲ 遊子地区

ても、厳しいものがあつた。

幾百年も続いた伝統あるイワシ網経営が、けん命の生産努力の甲斐もなく、経済法則によって押しつぶされる有様を身をもって体験した漁民は、漁業経営に対する不安から、海に対する自信を失ない住みなれた海に背を向けて、むらの後にし、転職者や出稼ぎ者となって四散し、人口はにわか減ってしまった。

そういう状況の中で、むらに残ったわずかな漁民を集め、漁協に対

する不信と疑惑の中で、連日連夜集會や部落座談会を開き、漁業生産について、漁家経営の将来について、組合員と根くらべの話し合いを重ねていった。何よりも、組合員を海へ呼び戻すことが第一と考え、真珠母貝の養殖で、むら再建の緒についた。

その後、混乱收拾期、基盤整備期、第一次再建計画期、第二次再建計画期を経て、昭和四十九年に十五年の長いトンネルを出たのである。

● むらの憲法ができた

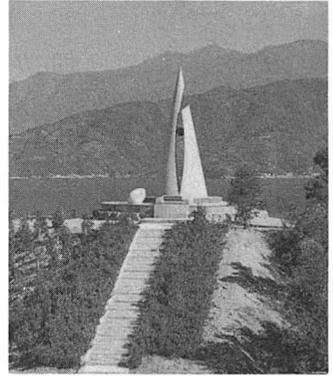
一年間にわたって組合員の中で討議され、昭和五十三年四月の総会で議決されたのが漁協運営要綱という、この「むら」の憲法である。第四条「この組合の組合員は共有財産である海の生産力を保持



▲ 古谷組合長

する責務があり、生活や生産行為によって海を汚染、汚濁する時は原因者負担の原則に基づき、これを清浄しなければならず、清らかで豊かな海を子々孫々に伝える義務を負う。」とある。

古谷組合長は、昭和五十八年の実践報告で、こう言っているのである。「海は地域住民の共有財産であることとは極めて自然であることですが、これが日常の生産活動の中ではたして、貴かれているだろうか、忘れがちになるのではないか。特に区画した漁場を長期間専用する養殖漁業については、とかく私物化する誤った考えが生じやすいのではないか、そして組合の指示も得ずに筏や生簀を勝手気ままに増やしたり、移動してたりしないか、養殖過程で出る汚濁物をたれ流しにして罪意識を感じない漁業者はいないか、即ち、海は自分一人の所有物でない、ましてや使用している者だけの海でもない、今は漁業を休業したり、中止している人々も含めたそこに住まう地域住民の共有財産である。



▲魚霊供養塔

そうした考えが薄らいでいないか、日常的に漁業者の自覚を促すことが漁協としての大切な任務である」と。

また、要綱第二十一条には、組合員教育について「組合は、組合員が経済競争の中でたくましく心豊かに暮らして行くために、地域での連帯と協同の生き方や思想について、部落共同体の中で、生産組織の中で、その自発的な協同活動を通して学びとるよう教育活動を強めねばならない。」とある。

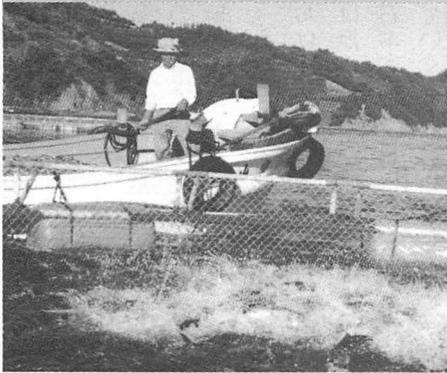
●憲法が生きているむら

市内から車で四〇分も走ると、魚見の丘と名づけられた、段々畑と養殖筏が一望できる小高い丘にさしかかる。そこには、昨春秋、

組合員の発想と浄財、永代無償提供の用地を受けて建立された魚霊供養塔がある。そのかたちは、人合掌、魚、真珠を表し、むらの思いが感じられる。ここは公園でもあるが、ゴミ箱を置いていない。憲法が生きているのだろうか。

「わしはお調子乗りじゃけんのう。」と言う組合長、なかなか、したたかで底が深いように思えた。「漁協が円の中心、拠点です。えさも油も資材も組合員が取りに行くようにしている。そこがコミュニティの拠点となるのです。ひとり歩きの出来る組合員づくり、組

飼育 一びき一びき手塩にかけて育てたハマチ



合に寄りかかった人間にはならないこと。生産とがっぷり四つに組む姿勢。いつも『海』をみつめる姿勢。ひとに頼らない、補助金に頼らず、科学的視点からも分析していく姿勢。漁場の汚染にしても私どもは、行政の言うように酸素量からの分析にとどまらず、独自に、研究機関の手を借りて、投入される有機物量の絶対的増加による海底汚染の調査を続けています。日本一厳しい地域、塩辛い水を飲んで暮らしていたむら。今、ここを日本一温かい「土地」にしようじゃないか。若者に夢を提供できるむら、「遊子にお嫁に行きたい」と言われるようなむらづくりをしようと考えているんです。」

あの、かつてのイワシ網漁業を支えた共同経営、地域自治の思想が、厳しい時代を耐えてこの「むら」、養殖漁業の「海」に引き継がれているにちがいない。

(取材/宮本)



柔軟に、そして頑固に生きる島

松山市釣島(つるしま)

松山市沖に浮かぶ小島「釣島」定期船の通わない島なのに、嫁不足の心配も後継者不足の心配もない島があると聞き、不思議な気がして行ってみたくなった。

松山市沖の興居島から約二キロ西の海上にあるのが、その不思議な島「釣島(つるしま)」である。釣島の人口は二〇世帯一〇八人で、すべてがカンキツ中心の専業農家である。

定期船の通わぬ島に行くには、松山市三津浜港から陸で生活している者には絶対に乗ることの出来ない海上タクシーに乗り、揺られること約十五分で釣島につく。

近付いてくる釣島を見ながら、昔NHKで放映していた「ひよこりひよたん島」を思い出していた。何故彼らが、ひよたん島で暮らしていたかは覚えていない

が、あの人形劇には、そこで生きていかなければならないという思いがあったと思う。「悲しいこともあるだろうさ、楽しいこともあるだろうさ、だけど僕らは挫けない泣くのは嫌だ笑っちゃお、進めひよこりひよたん島」と船の中で口ずさんでいた。

島で生きることは

釣島に渡ると、そこには町内会長の本木さんの親しみ易い笑顔があった。また、お年寄りたちの暖かいあいさつがあり、排他的な雰囲気はまったく感じられなかった。早速集会所で、町内会長の石本さん、副会長の小池さん、青壮年部会長の池本さん、青壮年部の小池さん、西原さんに集まって頂き、お話を聞かせて頂いた。

今から一二〇年ほど前に、興居

島から小林利松を組頭とする七人組が移住した時から、この島の歴史は始まっている。

しかし、この砂浜のない小さな島の宿命は、海の浸食による恐怖であった。

「あと五〇年もそのままではおけば、おそらく人の住める場所は無くなっていただろう。」という石本さんの言葉に、この島で生きていくことの厳しさを感じた。

現在、護岸整備は終わっており、この島が沈没する可能性は無くなるとのことだ。

また、農道整備等、島で働くためのハード面の整備は進んでいるが、定期船の問題、水の問題など今後の課題も残っている。

こういう環境のもと、釣島の子供達は、小学校を卒業すると島外の中学校に行くことになっている。

親戚の家に下宿したり、兄弟でアパートを借りたりとその生活は様々であるが、共通して言えることは、見知らぬ土地で積極的な仲間を作っていくかなければならず、自覚と忍耐力が身につくというこ

とである。

そんな中で、自立心を養っていくのである。「子供は、甘やかすこととんん甘えてくる。これだいいということはないのだから、依頼心をなくすよう厳しく育てていくことが大切なんだ。」という小池さんの言葉には、単に厳しいというだけではなく、親の強さを感じ、生きることに何が大切かを考えさせられた。

もう一つこの釣島には、厳しい宿命がある。長男は家を継ぐが、他の兄弟たちは、島を出ていかなければならないのだ。

なぜなら、耕作できる土地に限



▲写真・左から池本さん・小池さん
西原さん・石本さん・小池さん

られた面積しかなく、農業の経営規模を考えると島内で暮らしていくための適性人口とでも言える人数があるのである。

その農業も、一時のみかんブームは過ぎ去り、最近では、伊予柑の値段も不調である。しかし、この島の地形を考えるとどうしてもカンキツに頼らざるを得ないのが現実である。

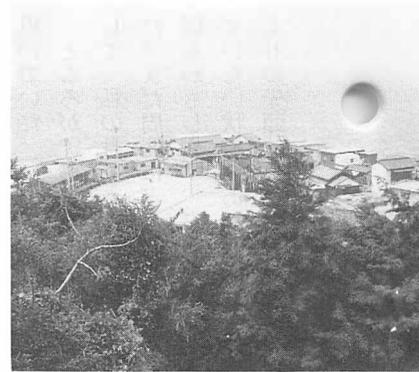
なぜ釣島で生きるのか

「この島で生きるって、いったい何なんですかね。」

話をしているうちに、こんな失礼な質問をしてしまった。考えてみれば答えようのない質問なのだが、どうしても聞いてみたくなったのである。

決して環境的に恵まれているとは言えないし、小さい頃から生きていくことの厳しさも知っている。それなのに、なぜこの島で生きていくのだろうかと思ったのだ。

私の奇妙な質問に対し、「この島の人の暖かさじゃないでしょうか」と、みんなの答えはとも



明快であった。

「一島一家」という言葉がこの島にあるように、全員で生きていくという仕組みができていているのである。

彼らは言う。「町の便利の良い所に住んでいても、隣が誰なのかも知らない。ふれあいがなく、機械みたいな暮らしの中で、人間性に欠けた感じがする。」と。

釣島では、苦楽は全員で味わう。だからこそ、人間性豊かであり、みんなの心と心が何か見えないもので結ばれているのだろう。

生きていくことの厳しさを知っているからこそ、本当の暖かさを身に付けているのかもしれない。そして、それが嫁不足の心配がいらないような個々の人間性となっているのだと思う。

結局は、人である。

そして、その人を育てていくのは、大きな意味での環境であると思う。

子供達は、常に親の背を見て育っている。だから、釣島の場合、親が後を継いでくれと言わなくても、親の姿を見ることで自分がやらなければならぬという気持ちになっていくのである。

そこにはやはり、厳しさだけではなく、人の暖かさや苦楽を共にできる「家族」がいるからではないだろうか。

柔軟にそして頑固に

「この頃の若い者は……という親父の言葉はよくわかる。」という青壮年部会長の池本さんの言葉は、私にとって、かなりショックングな言葉であった。

「この頃の若い者は……という年長者の意見に対して、「この頃の年寄は……」と言いつ返すのが、若者の気風のような気がしていたのだが、池本さんは違っていたのだ。

池本さんは、「時代の流れがあるのだから、だんだんと甘くなっているのだと思う。」と感じている。つまり、時代は流れているということを知っているのだ。

このことは、池本さんだけではない。釣島の人達は、みんな時代の流れを知っている。大人たちは、子供達が嫁をとるまでは自由にさせている。時代の流れのなかでは、仕方ないことだからと島をあげて応援しているようである。

農業で食べていけるけれども、次は、どうなるかわからない。そうなった時にでも、若者達に少しでも魅力ある島として生きていくために、食べていける間に次の一手として、釣を中心とした観光開発を考えたいと思っている。

このように時代に敏感に反応しながら、それでいて、「ここで生きていくんだ」という姿勢を、頑固なまでに持っている村、それが私が訪れた瀬戸内海の小さな島「釣島」であった。

(取材/近藤)

町の「ムラ」



愛媛大学教授

讃岐 幸治

クジ縁でできた群

松山市の南端（荏原）、自称松山の奥座敷、ここに私の住まいがある。

今から十数年前のこと、県住宅供給公社が、田畑の一部を造成し、住宅百二十七戸を売り出した。どこか安い住宅はないものかと、あれこれ捜していた連中が、数倍の倍率のなか、たまたまクジに当たって、住みついたところである。

突如として生まれた集落だけに、隣近所だれ一人として知る者もない。縁もゆかりもない人の群である。縁といえば、クジに当たっ

て同じ地域に住むようになったという、クジ縁ぐらいのもの。職業はもちろん、出身地も皆ちがう。ある日突然、松山市の南端に、大都会の盛り場での人間関係の如き、匿名の群が生まれた。こう想像してもらえればいい。これが、私のムラのはじまりであった。

暇に見えて館長に

「縁と浮世は末を待て」というが、群がコミュニティとしての村になっていくには、歳月が必要だ。それまで待つ以外にない。そんな思いでいた。

ところが、集会所の落成を前にして、私の身にある事件が起こった。まだ周囲にどんな人が住んで居るかも知らず、家の整理もできていない状態であったが、ムラづくりの先頭に立たざるをえない立

場に追い込まれてしまったのである。

後で聞いたところでは、その頃家で仕事をする日が多かったため、周囲の人は、私のことを三文小説書きか、失業中の身と、思っていたらしい。

そういう噂を聞いてであろう。高齢の男三名がわが家にこられた。若い地域には若い人の力が必要だと煽てたり、言外に若い身でブラブラしているのもつたいないと匂わせたりしながら、自治公民館の館長を引き受けて欲しいと、あれこれ説得される。頼まれたら、断れない性分、引き受けることになったのである。

暇に見えての館長就任とはいえず、引き受けた以上はやるしかない。楽しみながら、やるしかない。

かつて他の地域で自治会長を務めた経験があった。その経験からして、最初の取り組み如何が、前例踏襲をよしとする傾向の多いわが国の場合特に、将来の地域づくりの方向までも決しかねない、という思いを持っていた。そこで、はじめのうちから、地域のなかに

群を村にしていこうというムードをつくりだし、住民一人ひとりの自治能力を喚起していくような手を打っていくことにした。

子育て共同体の建設を

今、わがムラが群の状態なのは、だれもが納得しうる、共通のビジョンなり、ロマンなりが、ないからではないか。共通して達成すべき夢や目標があれば、それを達成していく過程で村ができてくるはずだ。

群衆が村人になっていくためには、共通して取り組める目標がいる。ロマンが、夢が、ビジョンが描けるのであれば、なおいち。大山町のような農村であれば、「梅を作って、ハワイに行こう」といったスローガンを掲げたかもしれない。

しかし、わがムラはすべてサラリーマン。産業起こしを前面に打ち出すわけにはいかない。新しいムラだけに、世帯主の七割が三、四十代で、どこの家も子育ての最中。ムラづくりどころではない、という雰囲気である。どうするか。

子育ての問題を前面に打ち出し、それで以ってユサブリをかける以外にない。子育て共同体の建設をスローガンにしよう。最も強い共通の関心事を収れんし、そこから地域のすすむべき将来像を描きだしていったのである。

親ならだれしも、いい子育てがしたい。環境が人をつくるという。ゴミのない、花の咲きみだれる地域でなくて、心美しき子どもが育つはずがない。大人が相互に反目し、敵対している関係から、思いやりや連帯感のある子どもが育つだろうか。

大人にとっては、この地域は単なる仮住いか、ネグランドであるかもしれない。しかし、今生まれ、育ちつつある子どもは、ここをふるさとにするしかない。

とすれば、子どものために、自然環境を整え、いい人間関係をつくりあげ、施設・設備を充実させ、そしていい思い出となるような行事を子どもに数多く体験させていく。そんな地域にしていく必要がある。

そうした地域でこそ、子どもは

伸び伸びと健全に育とうと、将来どこに行つたとしても、この地をふるさととして、誇りをもって生きていくであろう。

この地に「子育て共同体」を建設していこう。「子育て共同体の建設」の名のもとに、群を村にしていく運動をはじめていった。

だれもが主役に

夢があり、ビジョンがあれば、だれもが動きだす。「子育て共同体の建設」をめざして、最初は子どものために、そのうちに各人自分の持ち味を発揮することを楽しみながら、コミュニティづくりがはじまった。

夜間照明の設置、子ども文庫の開設、夜市、運動会、文化祭、キャンプ等の開催はもちろん、各種サークルの活動、月一回の清掃会など、いろいろな活動が実施されていった。

もちろん、施設、設備が整い、多くの行事が行われても、それらが住民みんなのものとして、根付き、支えられたものでなかったら、その意義はないに等しい。子育て

共同体は、みんなが認めあい、支えあい、高めあいながら創り出していく、そのプロセスこそが大事である。

だれもが、気楽に、主役として参加しうる風土なり、しくみをつくりあげていく必要がある。職業も出身地もちがうだけに、経験も発想も、また持ち味もみなちがう。このちがいを積極的に生かしていく必要がある。また、だれしも、自分が関与した案でなければ、主体的に参加したがるらない。

そこで、だれもがユニークな発想を出しあい、主体的に参加しやすいように、どの事業を行う場合にしろ、ワーク方式ですすめていった。

何事にしても、課題(目標)↓計画↓実行↓評価のサイクルですすめられる。どこが問題か、どんな活動をすればいいか、最初の課題(目標)を考える段階から参加し、知恵をだし、計画を練っていくワーク方式でなく、ただ実行の段階だけ動員されて参加するレーパー方式の場合、参加意欲は湧かないし、やらされの意識と疲労感

しか残らない。

だれもが主役として、問題意識をもって、積極的に取り組んでいくように、どの事業にしても、課題(目標)の設定の段階に、各人がアイディアを出し合う風土をつくりあげていったのである。

どの事業でも反対意見はある。みんなが賛成するような案は、多くは飛躍のない事業である。また、反対意見の出にくい場合もすべきでない。では、どうまとめるか。積極的にやろうとする者が燃え、どうでもいい六割の層を引き付け、その過程で反対意見を生かしていく。やりたいことがやれる風起こしが大事であった。

その他いろいろあるが、ムラづくりは、住民一人ひとりの出番づくりであり、各人の持ち味を発揮させる舞台であった。そして、各人が持ち味を三すつ出し合えば、三×三×……の成果が各人に還元される。活動したり、得になる。そんなムラづくりであった。



加藤憲一氏に学ぶ

『からいも交流』と農村の自立について

(財)愛媛県まちづくり総合センター

井上謙二



おりからの黄砂現象で風景ものどやかに曇った四月二十二日、私たち三名(宮本・山本・井上)は鹿屋市の「南方圏交流センター」を訪れ、『からいも交流』で知られる加藤憲一さんのお話を伺うことができました。

●加藤さんと農村社会

加藤さんは鹿児島県大隅半島の内の浦のご出身です。高校生のとき地元民間放送局が主催する派米高校生の一員として四十日間のアメリカ生活を体験され、そのことがきっかけで高校卒業後アメリカ



▲力説する加藤憲一さん

で六年間の留学生活を送られました。コロラド州の南コロラド大学

で二年間学ばれた後ワシントン大学に転校され、その極東ロシア研究所でアジア問題に取り組みました。ワシントン大学卒業後に東海岸にあるハーバード大学の大学院に入り、駐日大使を務められたこともあるエドウィン・ライシヤワー教授のもとで研究の日々を送られたそうです。

一九七四年に故郷の鹿児島県に帰国された加藤さんは、農村社会の変わりように驚かれました。当時の日本は高度経済成長の終期にあり、若者は都会へ流出し、後継者の無い農家も増えていました。恵まれた自然と人情の中で、人々は心豊かで活力があった農村が、すっかり自信を失い、活気のない

社会になっていたのです。

この農村社会を、以前のように魅力のある地域にしたいと直感された加藤さんは、そのことについて考え続けられた末、「過疎農村に新しい文化を興こそう」と気付かれ、一九八二年から『からいも交流』に取り組まれることとなったのです。

●『からいも交流』の広がり

今年で七回目となる『からいも交流』は、日本滞在中の外国人留学生を鹿児島の一一般家庭(主に農家や漁業・商業家庭)にホームステイとして招き、約二週間寝食を共にし、その家庭の仕事を手伝い夜には焼酎を飲みながら人間同士の裸の交流を展開している。いわゆる「草の根の国際交流」です。

当初、受け入れ家庭探しと留学

生の取りまとめ、そのための資金活動等、加藤さんと仲間のスタッフは相当苦労されたそうですが、回を重ねるごとに、一部の地域から近隣市町村へ、そして企業や行政にも理解が深まり、一九八七年には『からいも交流財団』という公益法人が設立され、運動はさらに広がり、期待される状況にあります。

『からいも交流』という、異なる文化を持つ人間同志の生活に根ざした真の国際交流を通じて、留学生は本当の日本を体験し、地域住民の方は、国際感覚を直接身につけると同時に、外国人と生活を共にしたという自信と誇りから、「中央と地方」という形で見ている「地域」というものを「世界の中之で地域」としてとらえはじめ、そこから、地域生活や地域社会のあり方について真剣に考え始めました。「異文化交流」というインパクトを得たことで人々の意識は確実に変わりつつあり、「国際交流」から「村おこし」へ、「アジアとの共生について考える」方向

へ、さらに「農村の自立」の方向へと運動は広がりつつあります。

ここで、加藤さんの運動理論について加藤さんの言葉を借りながら紹介させていただきます。

△「運動」すること▽

「活動」と「運動」は違うんです。「活動」はその目的なりメンバーの範囲内で行動し、その枠を超えることができない。いわば内部に向かって攻めている状態で、結局マンネリ化し、行きづまる事になるのです。一方、外へ外へと広がっていくのが「運動」です。

一つの目的をめざす中で新たな問題点を見出し、そこに新しい人々を巻き込みながら、さらに次の目的へと木が年輪を重ねるように広がるのです。行動することによりいろんな問題が「出てくる」のではなく「見えてくる」のであり、それを一つづつ解決していくことで運動のうねりを起こしていくのです。そのためには、マグマとして燃え続ける一定の人々が必要であ

り、その人々が衝撃波を起こすことによって運動のうねりが連続していくこととなります。

△意識の変革▽

戦後の日本の民主化は、敗戦によってアメリカからもたらされたものです。従って真の民主主義とは何かという精神的な面をなおざりにしたまま、「モノ」「カネ」中心の民主化―近代化路線へひた走ったのです。最近になってようやく、心の大切さ、精神文化の必要性が言われ始め、その意味では真の民主化が始まろうとする重大な時期にあるのです。

そういう流れの中で、農村の共同体は、互いに助けあう心のふれあいの場であったものが、自立できない者の集まり、依存心からくるなれ合い集団に変わってきています。このような農村の意識を変えようとする時、今述べた「モノ」や「カネ」では絶対にできません。それは「人」によってしか変われないのです。なぜなら、人は夢をみるからできます。夢というものは「モノ」「カネ」を超越

したのだからです。

△農村の自立▽

これまでのように、経済論でのみ農業をとらえると、コスト低減↓規模拡大という事になるが、その裏には機械化・耕地整備等の大きな投資が必要で、農民はそれに苦しむこととなります。ですから日本の農業は経済論でなく、社会運動としてとらえる必要があるのです。

たとえば、稲の手植え作業は、対話・助け合い・子供の教育などコミュニティの場でもあったが、機械化はそれを無くしてきました。今、一町の田があれば、三反は手植えにするべきです。そこは、家族や青年・消費者の参加できる場所であり、交流・体験・教育の場



▲笑いは世界の共通語

となるでしょう。そういう面では、農業は教育産業としてとらえるべきです。経済面+ α 、+ β の意義づけこそ必要なのです。

地域を変えようとしたら、まず自分が変わらなければダメです。地域が自立するためには住民一人一人が自立することから始まるのです。それは、人さえ育っていれば、あらゆる時代に対応できると信じるからです。今後は、現実の虚と実を見きわめる力を備えた、自立した農民の組織を全国に広げ、農村変革をめざしたいと思います。

夜遅くまで、加藤さんの熱い想いのこもった話が続きました。最後に「東京はつぶれても作ることができが、農村はそうはいかないんです。大切な日本の農村を守りたい、ということが根本にある人ですよ。本当にやる気のある人が四国にいれば、ぜひ鹿児島へ来てみて下さい。大歓迎です。」そう言われた顔は、あくまでも強い意欲と、深い信念に満ちているように感じられました。

「ひと」と地域づくり

大分県大山町キノコセンター

社長 矢幡欣治さんに聞く

(財)愛媛県まちづくり総合センター

幸 地 慎 一

る。肩ひじ張らず楽しみながらの発想だが、ねらいは町の人々のふれあいの場づくりで、町外との交流は年二回、体育の日と三月の梅まつりである。

「町内三十五の集落に残る行事を中心に和と輪の二つの「わ」で地域づくりに高めて行くことができればそれが一番強い。まずは地域が楽しめるものであるべきだ。」

地域づくりにイベントばやりの昨今、イベント発想の原点ではないだろうか。

● キブツ体験学習から

昭和四十四年、仲間三名とのキブツ二ヶ月間の体験が、その後の矢幡さんの地域づくりに大きな影響を与えている。

キブツとはイスラエルの共同組合的集団農場で、私有財産を否定し、生産から消費まですべて集団化した共産的農場で、海外からの体験学習者もボランティアで参加している。

「農業生産は他産業のように高度経済成長について行けず、食も満たされれば生産性を向上しても



矢幡斯治さん

● ハチミツとの出会い

私達の訪問の主旨をひと通り話し終える頃、矢幡さんとハチミツとの出会いを聞く。

「NPC運動の最中、梅の生産量が伸び悩み、アメリカのクロロバー会社をヒントに養蜂を始め、副産物のハチミツで飲料をつくった。途中病気のハチが発生し養蜂を断念。十二年前に中国へ行き、二トンのハチミツを輸入したが、当時の国内価格は中国の八分の一程度、知り合いの取引先との交渉で五〇〇万くらいの利益が出た。」

桜の花も終わりの四月の末、NPC運動(梅と栗の生産による農業の軽労働化、高収益化運動)を契機に村おこしを成功させている大分県日田郡大山町を訪れた。

日田市から車で約十五分、大山町は人口四、七〇〇人、約一、〇〇〇世帯に平均耕地面積五反そこそこの農家が七〇〇戸余りの農業の町である。町の中央部、大山川流域にわずかの平地を残すが、周囲を山に囲まれた盆地状の土地に三十五の集落が点在している。

前日、町役場企画情報課長の緒方英雄さんから、CATV(有線テレビ)など現在の大山町の取り組みを聞き、その先進性に驚いたが、大山キノコセンター社長の矢幡欣治さんを訪ね、さらに感動を深めた。

収入につながらない。キブツでは世界的量産時代から生産過剰時代の到来を見越し、既に工業部門を取り入れつつあった。この時、従来型農業を補うのは工業部門だと直感した。」と語る。

さらにキブツでは、物事への取り組み姿勢においても、例えば、工場をつくるとなると、メンバーの子供達の専門教育を徹底して行い、まず人材の育成から始めている。

派遣当時、矢幡さんがキブツに見たものは、大山町の将来の姿であったに違いない。その後「世界を知ろう会」を結成、青年海外研修基金制度を設けるなど努力を続け、現在も交流を深めている。

●まず、人づくりから

「池に石を投げ込むような刺激を与える人が農村には割といないし、人と接する機会も少ない。こんな状態が何年も続けば、優秀な人材でも錆びてしまう、個人で出来なければ地域全体で波を立てさせること。根気よく刺激を与え続ければやがて意識は芽ばえる。人づ

くりは息の長い仕事だ。」自分の町を違った視点から見つめること、見知らぬことに感動を覚えることに成長の原点があるのかも知れない。

さらに、地域づくりでは「すそ野」を広く持たねば高い所を望めない。湯布院のすばらしきは、当初のリーダー達が仕掛けて火をつけ、すぐに表舞台から身を引き、すそ野づくりをしたことだと評価する。

●地域づくりと目利き

モノが豊かになった現在、消費者ニーズにはつくる側からの発想がなくてはならない。農業では、感性豊かな幅の広い視点をもつ目利きの農業と、従来型の篤農家ではなく、時代を肌で感じる目利きの農業後継者を育てる必要がある。それぞれの分野での一流になるための努力を続けなければならないことも強調する。

●次代を担う子供達のために

「子供達が大人になった時の社会を考えると、大変な国際化の時代であり、生産活動にしても文化

活動にしても、社会環境の変化に対応できる子育てが必要だ。父（矢幡治夫氏）の偉大さは、この片いなかで常に十年先のことを必死で考え、行動したことだ。」矢幡さんも自らピアノ教室やスキー教室を聞いたたり、我が子に乗馬をさせるなど環境づくりを実行している。

「大山町にいるから、いなかにいるから何もできないということではなく、子供達が社会に出、はつらつとたくましく生きて行ける子育ての環境こそ大切だ。」と人づくりの教育に自ら情熱を燃やす姿には頭がさがる思いである。

また、後継者の国際感覚を養う試みとして、キノコセンターが十周年、十億円事業の達成記念の折、矢幡さんの発案で、五〇〇万円を預かり、中・高校生を対象とした海外体験学習を実施している。

●自らを追い込み前向きの人生

矢幡さん自身、これまでに百二十回もの海外経験を踏み、夫婦でも年一回は出かける。「金をつかう目的がなければ稼ぐ目的（経営

の目的）もできず、前向きの目標も立たない。」と職場でも全員が海外旅行やスキーを楽しむ。必要経費は会社の原価に算入している。何ごとにも、見てくる、考えてみる、やってみる、の姿勢で自ら率先して行動する。

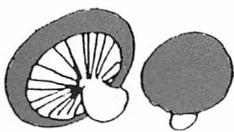
今後の農業の方向として、「日本の国が成熟したことにより、これからは余暇の過ごし方に対応できる経営を目指すべきだ。」と意欲を燃やす。

矢幡さんのお話しは、その一つひとつにずしりと重みを感じられ、実践を通して得た自信と誇りにみちている。地域づくり、人づくりの話題はつきなかつたが最後に矢幡さんのモットーを紹介したい。

百聞は一見にしかず。

百見は一考にしかず。

百考は一行にしかず。



世界の人形劇がやってくる!

国際人形劇フェスティバルin松山



松山ヤングネットワーク

田村純子

●松山ヤングネットワークとは：
松山に住む若者が青年として自

分自身をみがき、「きのうより今日」と自らを高め、人々とくらしと地域へのかかわりを深めると共に貢献することを目的として三年前の国際青年年（一九八五年）に誕生した新しい都市型青年団、これが私たち松山ヤングネットワークです。

●主な活動内容は……

青年たちのつながりに重点をおき、若者たちの参加できる各種イベントの企画や、スポーツ、文化活動を通してつながりを深めたり、他県の青年団との交流の中で積極的に学習してきました。

また今年度からは、青年に限らず地域社会へ運動の展開を図っていかうとしています。その第一歩として若者たちの手づくりイベント

▲ザ・ヒューバー・マリオンネット(米)糸あやつり人形



トを企画しました。私たちの若い力を出し合い、「二十一世紀を担ってゆく子どもたち一人ひとりに、夢と豊かな心を持ち続けてもらうために」という主旨で『国際人形劇フェスティバルin松山』を松山市総合コミュニティセンターで、七月二十二日～二十四日にかけて開催します。

●国際人形劇

フェスティバルとは……

伝統民俗芸能の宝庫といわれる長野県飯田市で国際児童年（一九七九年）に『人形劇カーニバル飯田』として産声をあげました。今では世界二十八カ国から二百人を

越える劇人を加えての国際規模のカーニバルとなり、飯田市は「人形劇の街」と言われるようになりました。この全市を上げての文化事業に成長した人形劇の祭典を全国の子どもたちにも見せるために、昨年『国際人形劇フェスティバル』として文化庁の団体である現代人

形劇センターで企画されました。

●子どもたちへ……

人形劇は、子供たちの創造力を養い、夢を与え、豊かな心を育てます。人形劇を見る機会の少ない現代の子供たちに、初めてやってくる外国の人形劇が、言葉を越えて語りかける生の舞台を楽しんでもらいたいと思います。

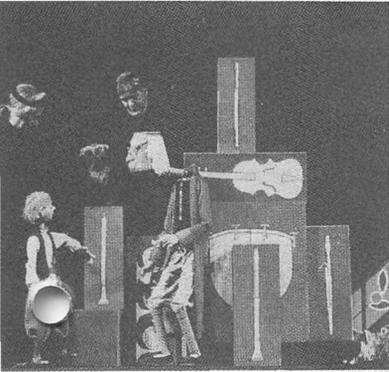
■開催場所

松山市総合コミュニティセンター

ターキヤメリアホール(有料) イベント広場・子供館(無料)

■日時

昭和六十三年七月二十二日・二十三日・二十四日



▲ピーターとおおかみ
ダシルバ・パペット・シアター(英)

■入場料

一、二〇〇円

(三才以上キヤメリアホールのみ)

有料)

■問い合わせ

松山市来住町四八三の一

深井総合企画内

国際人形劇フェスティバルin

松山事務局

☎(〇八九九)七六一七四六七

(担当・深井)

国際人形劇フェスティバルin松山 公演日程と組み合わせ

日時	I・10:00開演	II・13:00開演	III・16:00開演	IV・19:00開演
7/22 (金)			ガラスになった英雄 (フランス) ピーターとおおかみ (イギリス) 郷土芸能	ガラスになった英雄 (フランス) ピーターとおおかみ (イギリス) 郷土芸能
7/23 (土)		パンチとジュディー (イギリス) ペトリュシカ (アメリカ) 郷土芸能	コッペリア (イギリス) マリオンネット・レビュー (アメリカ) 郷土芸能	パンチとジュディー (イギリス) ペトリュシカ (アメリカ) 郷土芸能
7/24 (日)	コッペリア (イギリス) マリオンネット・レビュー (アメリカ) 郷土芸能	ガラスになった英雄 (フランス) ピーターとおおかみ (イギリス) 郷土芸能	パンチとジュディー (イギリス) ペトリュシカ (アメリカ) 郷土芸能	コッペリア (イギリス) マリオンネット・レビュー (アメリカ) 郷土芸能

フェスティバルin四国カルスト

遊び放題！食べ放題！四国の夏の皮切りです！

柳谷村青年団長

小坂 貢

七月二十四日、今年もまた「フェスティバルin四国カルスト」の季節がやってきました。今年で七回目を数えるこのイベントも今までは青年団が中心となっていて行ってきましたが、実行委員会を新たに発足させ今まで以上に充実したイベントにしようと呼びかけています。

このイベントのメインであるバーベキューまつりは、今年から肉の量を倍増し柳谷産黒牛の肉を思いつきり食べてもらおうと思っています。この黒牛和牛の肉の販売

も行いますので持帰って御家庭でもおいしい肉の味をお楽しみ下さい。

そしてフォークロック野外コンサート、県内外からのアマチュアグループによる野外ステージでのコンサート。

この二つを合わせて考えてみると思わず行ってみたいと思いませんか？

澄みきった青空の下でビール・ジュース・高原の牛乳でどろろを潤しながら目の前で肉を焼きながら好きなだけ食べ、野外ステージでのコンサートを聴くという夏の素敵な一日を約束できると思います。

柳谷村のお母さん達がつくる手づくり料理の数々、ふるさとの味フェスティバル”。アミノウオの塩焼からとうもろこし、でんがく、と何かを忘れている今の時代、むかしなつかしふるさとの味はいかがでしょう？

子供達にもいい思い出をつくらせてもらおうという考えでみました。特設のプールで柳谷村の川魚「マス」を素手でつかまえてみて下さい。そして四国カルストでの「たこあげ」はいかがですか。もちろんその「たこ」もみなさんの手作り澄みきった青空に快く上げて下さい。

バーベキューで食べる肉、柳谷産黒牛和牛の体重を当てて下さい。目で見て、手でさわって牛の体重をピタリ当てて下さい。

今までの体験を生かして、今年フェスティバルに来ていただく人には本当にいい思い出を沢山つくってもらえるように精一杯の準備でみなさんをお待ちしています。

今年の夏、七月二十四日、四国カルスト五段高原へ。

そして「フェスティバルin四国カルスト」でいい思い出をつくらせてみてはいかがですか。

日時：7月24日（日）AM11：00～（雨天中止）
会場：四国カルスト高原 姫鶴平（姫鶴グラウンドを主会場とする。）
入場料（柳谷牛バーベキュー祭）
＜チケット料金＞
大人（中学生以上）前売券 3,000円 当日券 3,500円
小児（小学生以下）前売券 1,000円 当日券 1,500円
※券1枚につき（缶ビール・缶ジュース・高原乳）いずれか1本サービス
総合問い合わせ等、連絡先
フェスティバルin四国カルスト実行委員会 事務局
TEL 08925-4-2121（内線29）



柳谷村物産品コーナー



アミノウオの塩焼き

▲フォークロック野外コンサート



▲おいしいバーベキュー

ドイツからやってくる草の根文化交流

全国縦断ボランティア・コンサートツアー

かぐや姫クラシックコンサートいかざき

五十崎町商工会青年部

部長 宮部 真喜男

「アメニティ I K A Z A K I」
を目ざす、喜多郡は五十崎町より
またまたビッグイベントの案内で
す。題して『かぐや姫クラシック
コンサートいかざき』。

わずか一、五〇〇円の入場料で、
なぜかドイツからのクラシック音
楽隊に生で接することができる
という、まことにひなにはモッタ
ナイ企画です。

仕掛人は西ドイツウルム市在住
で、ウルム市立歌劇場の首席ファ
ゴット奏者である杉本 暁史氏。

それがなぜ五十崎でという疑問
については、語れば長くなるので
全て省略しまして、とにかく演奏
は超一流、さらにうれしいことは、
この自費でやって来られるドイツ
人二名、チェコスロバキア人一名、
日本人五名の人達は、ふだんそう
いった機会にめぐまれない地域で
演奏をしたい、しかもホームステ
イをし、その人達と語り合いたい
という、まさに「草の根文化交流」
を目ざすツワ者揃いなことです。

そんな彼らの情熱の演奏と語り
に、どうです、あなたも参加しま

ドイツからやってくる草の根文化交流
全国縦断ボランティアコンサートツアー

『かぐや姫クラシックコンサートいかざき』

- ▲主催 五十崎町商工会青年部
全国地域活性化ネットワークワーキング協議会
- ▲後援 ドイツ大使館
- ▲協賛 日本航空・PIONEER・SUNTORY他
- ▲日時 昭和63年7月22日(金) PM7:00開演 (PM6:30入場)
- ▲場所 五十崎町コミュニティセンター
- ▲入場料 1,500円 (旅費の足しにさせていただきます)
- ▲演奏者
バイオリン 浜田 新, 磯村みどり
ビオラ 磯村 寿彦
チェロ ウーリッヒ・シュナイダー
ソプラノ 黒河内万貴子
クラリネット トーマス・ダイゼンドーファー
ファゴット 杉本 暁史
- ▲曲名
1. クラリネット五重奏曲 モーツァルト
2. ピアノ独奏 ショパン夜想曲
3. 弦楽四重奏曲 シューベルト
4. ソプラノ独唱 モーツァルト
ドボルザーク (ジプシーの歌)
ドボルザーク
シュターミッツ
5. ピアノ五重奏曲
6. ファエット四重奏曲
7. クラリネット独奏
8. チェロ独奏
9. ソプラノ独唱
サンサーンス (白鳥)
レハール他
オペレッタ小曲
ラフマンノフ
赤とんぼ他
10. ソプラノ独唱
◎ 全員合唱

せんか。そして、できたら来年は
私の村で、町で、というそんな気
概もぶつけてみませんか。



五十崎藩、藩づくり哲学

その「V」



えひめ地域づくり研究会議
代表運営委員

亀岡徹

我が五十崎藩は、いつも述べるごとく、

(一)美しい自然

(二)美しい人

(三)美しい産業

を、基本戦略として、行動しています。

その内、(三)美しい産業と言う言葉に、非常に広い意味を持たせていましたが、納まり切らなくなったので、「美しい産業」を「美しいネットワーク」に、言葉を変更しました。

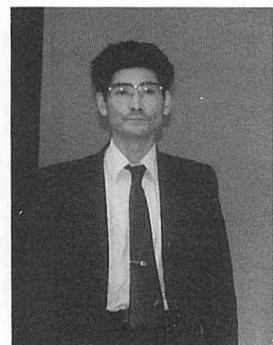
(一)、(二)については以前に述べたので、今日は、(三)について述べます。

私達は、常日頃色々な「しくみ」を使いながら生きています。色々な「しくみ」とは、例えば、役場・農協・税務署・商工会・企業・文化団体・グループ・etc. など、たくさんあります。ややもすると、色々なしくみに「属しながら」と、考えがちであります。

そうではなくて、しくみを「使いながら」生きています。「しくみ」は「すてきな五十崎」を作る「道具」として存在する。「しくみ」や「主義主張」は、それそのものに意味があるのではなく、それは道具として使われて初めて意味を帯びる。それはあくまで道具であるから、鋸や鎌に等しい使い手の降り回し方によって多様な働きを示す。

では、その「しくみ」はどうあるべきか。

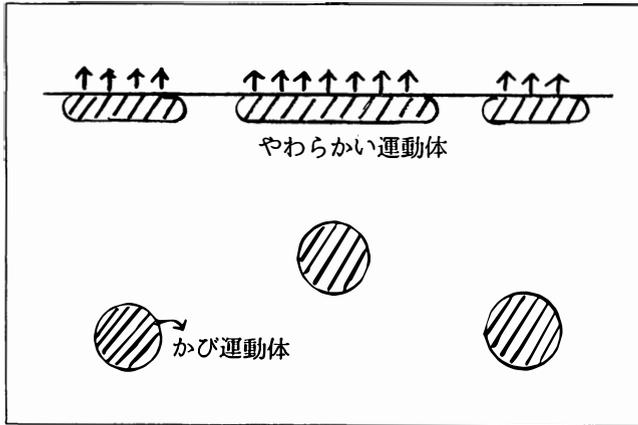
「しくみ」はネットワーク状でなければならぬ。即ち網状でなければ、ネットワークを使う人(兵士)が充分な働きが出来ない。网状組織とは、中心点(権力集中点)を持たず、始まりも終りもない、一カ所を引っぱれば全体がしなやかに延びて、各菱形の網部はその引っぱる力に応じて変形しながら対応する。情報を発信しながら、それはあたかも、各分



子(しくみ)がコロイド状となってキラキラと浮き漂っているような状態である。その浮遊物体を浮かしている液体は非常にやさしい組成から成り、コロイドの分子と分子の情報伝導体でもある。

情報伝導液体については、浮遊物体そのものも非常に柔らかく、定型ではない、あやふやな、あいまいな型をしている。あいまいであやふやなと言うことは、液体に浮かんだとき表面張力がりに近いので、無限にあやふやに広がるうとする性質を持ち、それゆえに液体の表面一面に広がり、他の組織とも重なり合ってキラキラと情報を発信する。

この反対に、表面張力が強く固いと、内に引っぱる力が強く内にもってゆく。ほとんど球形となり、(ご承知のように浮力は、液体につかっている部分の体積に比例するから)



球形組織体は、浮力を失って沈んでゆく。沈んだ運動体は、新陳代謝はなく、やがて腐り始める。最も恐いのは、腐りつつあることをこれは正義だ、と思い始めることだ。腐臭を放ちつつ、腐敗毒を振り撒き内にこもる。運動体は淋しがりやなのでカラオケなども歌いつつ、隣の組織も吾と同じであるべきだと思いがたりする。なぜならば、内にこもる硬い運動体の最大の武器は多数決だからである。このようにして「美しいネットワーク」は、

出来るだけ求心力のない、表面張力の低い、はなはだあやふやな、しかも、運動体全面から情報を発信する組織体と言うことになる。

それでは、そのネットワークづくりの必要条件は、どうか。

- ①人は信用せず愛すること。
- ②多数決は、存在しない。おのれ一人の力で登ること。但し、追隨者は容認をし、決してケトばしたりしないこと。

③家庭は、町づくりの道具であり、あってもなくても、同じことである。

④言葉でもって、人が説得出来るなどという妄想をいだいてはならない。

⑤いのち・金・地位・名譽は、すてきな劇を演ずる舞台上の小道具である。演ずる劇がなければ、元々必要がないものである。

どんなことがあっても多数決でネットワークを動かしてはならない、多数決を導入したとき、浮遊組織体は、ガン細胞に侵され腐り始める。多さと正しさが時として一致しないことは、過去の例を待つまでもない、美しいネットワークが存在し得る絶対条件である。間に合わなければ、共に安楽死をしようではないか。

最後に一編の詩を引用する。

カルロス・カスターネダ「力の物語」より。

- 一つ、孤独な鳥は 高く高く飛ぶ
- 二つ、孤独な鳥は 仲間を求めない
- 三つ、孤独な鳥は 嘴を天空に向ける
- 四つ、孤独な鳥は 決まった色を持たない
- 五つ、孤独な鳥は 静かに歌う





研究会議からのお知らせ

当初、5月の予定でした課題別研究集会「海」を次の要領で開催します。まだ確定していない点がありますが、追ってご案内させていただきます。

▽ とき 昭和63年8月9日(火) 13:00~18:00

▽ ところ 遊子漁業協同組合 二階ホール、研修室

▽ 参加費 1,500円

◆ エクスカーション 当日10時より 県水産試験場 養殖漁業現場(共同作業場)など

◆ パネル展示 目で見る遊子・海

◆ 部会討議 3部会

◆ 全体討議

◆ 総括講演 海………くらしの中で考える

講師 未定

◆ 交流シンポジウム 18:30より

▽ 主催 遊子漁協漁業後継者会議 えひめ地域づくり研究会議 (財)愛媛県まちづくり総合センター

▽ テーマ 「海」………くらしの中で考える

▽ 趣旨

海は広く大きいもの。船さえあれば、一番広い「みち」であり、未知の、冒険の世界でもある。海を見て暮らしている人には、そのありがたさが直接感じられるし、まちややまに住んでいる子供なら、夏休みの楽しみであろう。時代が進み、豊かさとともに生活様式が変わっていくと、くらしも環境も変化する。

漁業をより広い視野からとらえることは、「海」と「私たち」の前に、それぞれ広い「みち」が開けてくるのではなかろうか。

今、発信する。………遊子からの提言「私たちはこうしたい。」 水域環境、水産業、魚食文化、リゾート、交流など、くらしの中で「海」を考える。

※(財)愛媛県まちづくり総合センターは、四月二十三日から土曜日の業務は、午前中のみとなっておりますのでご了承ください。

☆ ☆

まちづくり活動の情報紙としてのこの「舞・たうん」を隔月で発行しております。

皆様からのレター通信紙として活用できれば幸いです。

内容についてのご意見や、活動内容についての記事など気楽にどしどしお寄せ下さい。

次回「舞・たうん」特集は「商店街」です。

「舞・たうん」編集係

二人のG.A.L.(都築・

田村)まで。

〒七九〇 松山市道後二万一の二

財愛媛県まちづくり

総合センター

TEL〇八九九(二五)五五五七

FAX (二五)六六八〇